

《ダルマ通信》

アメリカ陸軍中尉エレン・ワタダの反戦闘争

2006年8月30日

明治以降、日本の貧しい時代に海外へ移民した日本人は、概ね温厚で控えめな人が多い。しかし、彼等には、外見のおとなしさの内に己の信念を貫く気骨が秘められている。祖国とは著しく異なる厳しい自然環境と言語障壁や風俗習慣の違いに加えて理不尽な人種差別を受ける苛酷な社会環境の中で、忍耐と勤勉でもって自分たちの生活基盤を築き上げ生き抜こうとした人々には、それなりの資質を要したのである。

かくして、日系移民一世たちは、二世・三世たちに気骨ある忍耐と勤勉の気質を受け継がせながら高等教育を受けさせ知性を高めることによって、自分たちを苦勞させた社会的悪条件を克服させようとしたのである。筆者にも、幾度かその成果を垣間見るような感銘深い体験がある。ペルーの大統領にまでなった男に見るような気骨と英邁さを併せ持った海外各地の日系移民二世・三世・四世たちが少なくない。以下に紹介するのは、そのような日系移民三世の一人であり、目下アメリカ合衆国での反戦運動に飛躍的な新局面を作り出して注目されている剛毅な青年である。

彼の名前は、エレン・K・ワタダ(Ehren K. Watada)。1978年6月ハワイ州ホノルル生まれで、現在28歳。大学卒業までハワイで育ち、2003年6月に米国陸軍に入隊して2年間韓国駐留部隊に勤務した後、2005年6月より米国ワシントン州フォートルイスを本拠とする第2歩兵師団第3旅団ストライカー戦闘チーム(精鋭緊急即応部隊)所属のエリート将校(陸軍中尉)である。彼は、韓国在勤時から米国軍人の模範として最優秀将校の一人に挙げられるほど高い評価を受けていた。[『ニューヨーク・タイムズ』紙2006年7月23日の記事「イラクへの派遣を拒否した将校が軍法会議に」<http://www.nytimes.com/2006/07/23/us/23refuse.html?ei=5088&en=b4abeaf6627dfef8&ex=1311307200&pagewanted=all>]

因みに、同じハワイ出身の日系アメリカ人(二世)でワタダの大先輩にあたる著名な軍人がいる。エリック・ケン・シンセキ(Eric Ken Shinseki)である。シンセキは、アジア系アメリカ人で初めて四つ星将軍(陸軍大将)となり欧州駐留米軍総司令官、米国陸軍副参謀総長、同参謀総長(1999~2003年)を歴任して米国陸軍の頂点に立ったが、ブッシュ政権下ペンタゴンの暴君ラムズフェルドらの強引な軍組織の改変と無謀なイラク侵攻作戦を批判して一歩も譲らず、ブッシュ政権首脳部や「国防総省」に君臨するラムズフェルドら文官指導部の陰險な圧力にもめげず抵抗を続け、2003年6月に定年退役した。当時、シンセキ大将は、傍若無人なラムズフェルド「国防長官」に抵抗した冷静沈着で気骨ある米国軍人として世界中に名声を馳せたが、従来から、彼の物静かで控えめな人柄もあって米国陸軍内での人望も高く未だに彼を慕う者が多いと聞く。



米国陸軍第34代総参謀長
エリック・ケン・シンセキ大将



エレン・K・ワタダ米国陸軍中尉

他方、エレン・ワタダ中尉は、本来ならばエリック・シンセキ大将のようなエリート軍人の道を歩むことになったであろうが、折から米国内でのクーデターまがいの政変による暴虐ファシスト政権の出現によって彼の人生行路は激変する。

捏造された口実によって侵攻したイラクでのアメリカ軍の甚大凄惨な破壊と殺戮、様々な残虐行為を繰り返しながら自らも多数の死傷者を出し兵士等の家族ともども悲惨な犠牲を強いる侵略戦争を目の当たりにして、青年将校ワタダは、憤りを押さえがたく、その侵略戦争に反対し米軍兵士たちに参戦拒否を呼びかけ且つそのような非道な侵略戦争を強行する現政権を糾弾してアメリカ合衆国政府の立て直しを訴える反戦・反ファシズムの勇士に転身する。

期せずして、同じ日系移民の子孫にたぎる気概と英邁な気骨が、時の暴虐政権下の最上層部では四つ星將軍シンセキ大将の不屈の抵抗となり、戦場に駆り出される陸軍部隊の現場では青年将校ワタダ中尉の剛毅な反戦・反ファシズム闘争となったのである。

そこで、ワタダ中尉は、先ず、彼自身の学習と研究の結果としてブッシュ政権が強行するイラクでの侵略戦争とそれを支える内外政策を根本的に米国憲法に反し米国人民の利益を侵害する不正不法な反アメリカ的行為として糾弾する。そして、本来のアメリカ軍人の在り方として、目下のイラクでの侵略戦争に参戦して戦争犯罪の共犯者になることを拒否し、そのような戦争犯罪を強行する政権の在り方にも強く反対して本来の憲法に則ったアメリカ政府の再建を主張する。

本年(2006年)1月、当時27歳のワタダは、イラク戦争に対する抗議と自らの参戦拒否の意思表示として陸軍当局に対し2度にわたり退任除隊を申請したが、契約期間(本年12月3日までの3年間)を盾に却下された。その後も、ワタダは、イラク戦争の違法性とアメリカ軍の戦争犯罪を訴え続け、また自らの参戦拒否の意思表示を繰り返した。本年6月、ワタダは、所属部隊と共にイラクへの派遣を予告されるに至り、6月7日、前日に用意した声明文読み上げの録画ビデオを公開し、大勢の報道陣や支援諸団体の前で公然とイラクへの派遣命令を拒否することを表明した。[貼付資料(1) エレン・ワタダ中尉のイラク派遣命令に対する拒否声明]

この拒否声明の翌日(6月8日)、ワタダは、所属部隊司令官から彼の言動に対し軍規違反の疑いで調査する旨の通告を受けたが、6月22日には軍当局に対し正式にイラクへの移動命令を拒否することを伝えた。これによって、7月5日、ワタダ中尉は、米国統一軍事裁判法の3条項(第88条によるブッシュ「大統領」に対する侮辱・2訴因、第133条による将校及び紳士にあるまじき行為・3訴因、及び第87条による移動時不出頭・1訴因)により公式に訴追され軍法会議にかけられることになった。[訴追状: <http://thankyoult.live.radicaldesigns.org/images/stories/pub/army-charges-5jul06.pdf>]

その後、8月17日に軍当局の調査官による審問が行われ、8月22日に同調査官による審問報告書が公表された。そこでは、調査官は、「ワタダ中尉が彼の信ずるところにおいて誠実である」と認めながらも、「本件は一般軍法会議にかけられるべきか否かを決定するに該当する」として、所属部隊司令官の最終決定に委ねる形で事実上の訴追勧告をした。[当該審問報告書: <http://thankyoult.org/images/stories/pub/watada-art32.pdf>:<http://thankyoult.org/images/stories/pub/watada-art32.pdf>]

これを受けて、9月以降には軍法会議が開かれることになろうが、もしワタダ中尉が上述の6訴因全てで有罪とされると、彼は、ブッシュ「大統領」がアメリカ人民を欺き違法な戦争に引き入れたとの意見を述べただけで5年の懲役刑になるなど、合計7年以内の懲役を科せられることになるのである。

これに対して、ワタダ中尉側は、8月28日に各訴因に対する反論書を提出し弁護団を充実して徹底的に争う構えを取っており[反論書: <http://thankyoult.live.radicaldesigns.org/images/stories/pub/art32-rebuttal.pdf>]、また各種支援団体が連合して集会を重ね支援組織の拡大を図っている。また8月12日には、ワタダ中尉は、シアトル市内で開かれた「平和のための退役軍人」全国大会[同退役

軍人会の会員数は 5,000 人以上と云われる] で約 500 人の参加者を前に演説して堂々と所見を述べ、それが多くのメディアによって全米のみならず世界中に報道されて、広く世界の反戦運動に感動を呼んでおり、今後の成り行きが注目されている。[貼付資料(2) エレン・ワタダ中尉の「平和のための退役軍人」全国大会における演説]

この演説で特に注目すべきは、次の 2 点である。即ち、(1)アメリカ合衆国の兵士は、入隊宣誓通り、憲法と人民大衆に対して忠誠を尽すのが義務である。故に、各兵士は、直属上官の命令はもとより、たとえ大統領の命令であろうとも、憲法に違反し人民の利益を侵害する命令には従うべきではなく、違法な戦争への出動命令や戦闘命令を拒否して戦争犯罪への加担を回避するのは当然の義務である。(2)違法な戦争を阻止すべく兵士たちがこぞって参戦を拒否するためには、彼等が時の政権の不当な国家権力の行使による強制や抑圧に対抗できるように人民大衆の幅広い支援が必要である。特に、個々の兵士が制裁や処罰を恐れず安心して参戦命令を拒否できるように、彼等の家族たちの生活をも保障する支援体制が必要である。

目下のブッシュ政権によるイラクでの侵略戦争においては、ペンタゴンの発表でも、2003 年 3 月の侵攻開始以来 3 年間で既に 8,000 人以上の「無許可離隊者」(30 日以上経過すると公式に「脱走兵」とみなされる)が出ており [http://www.usatoday.com/news/washington/2006-03-07-deserters_x.htm]、又今年初めの世論調査ではイラクに配置されているアメリカ兵の 72% が今年中に完全撤兵すべきだと答えている [<http://www.zogby.com/NEWS/ReadNews.dbm?ID=1075>]。こうした実情では、ワタダ中尉のように部隊現場の指揮官たちが上層部の出動命令を拒否すれば、戦争遂行は事実上不可能となるだけでなく、戦争の実働組織としての軍隊の内部崩壊も起こりえる。

従って、ワタダ中尉のような反戦抵抗者に対する帝国主義ファシスト政権の対応は、なりふりかまわぬ過酷なものとなろう。それだけに、アメリカ国内の反戦勢力だけでなく世界中の良識ある人々は、強く連帯して結集し、弱冠 28 歳の青年将校エレン・ワタダが命をかけて作り出した反戦闘争の新たな局面を促進し拡大しなければならないのである。

現在世界中どこにでも戦争を仕掛けることができるのは、超大国アメリカを支配する野蛮な侵略政権だけである。先ずはその戦争体制を侵食し瓦解させることが、現代人類社会全体の平和を構築するための大前提になることは明白である。従って、世界諸国においてそうであるように、日本の反戦運動も、「日米安保体制」の解消と在日米軍基地の全廃を目指すと同時に、今やアメリカ国内においてワタダ中尉らが先導する新たな反戦・反ファシズム運動に全面的に連帯しそれを全力を挙げて支援しなければならない。

これから、いよいよワタダ中尉の軍事裁判が始まり、彼ら庶民にとっては多大な負担と犠牲を伴う困難な闘争が進展する。エレン・ワタダの両親や兄弟たちは、当初から一家を挙げて彼を支援し、既に両親は米国内での支援拡大と闘争資金集めに献身的な全国行脚を続けている。我々日本人もこの剛毅な青年の一家を全力を挙げて支援しようではありませんか。

以上